



発行所 東京都千代田区一ツ橋一丁目2番2号 〒100-0003 日本製紙株式会社新聞営業本部 電話 03-6665-1030 FAX 03-3217-3161 www.np-g.com/ newsprint@np-g.com ©日本製紙株式会社2011



# 赤津隆一新聞営業本部長 就任のご挨拶

3月17日付で新聞営業本部長に赤津隆一が就任しました。赤津は福島県出身、1975年(昭和50年)入社以来、長く新聞営業の仕事に携わってきました。5年ぶりに新聞営業本部に戻ってまいりましたが、これまでの経験を生かして、どのように新聞用紙事業の舵をとるのか、「赤津号」がいよいよ出航致しました。皆様方にはこれまでと同様にご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い致します。

**本部長に就任して**  
初めに、この度の東日本大震災により被災された方々に心からお見舞い申し上げます。また、謹んで亡くなられた方のご冥福をお祈り申し上げます。  
各新聞社の皆様へは大変ご心配をお掛けしましたが、様々な激励やご支援を頂き

大変感謝しております。この場をお借りして改めてお礼申し上げます。  
東日本大震災により基幹工場である岩沼工場は甚大な被害を受けましたが、震災後1カ月で3号マシンが立ち上がり、2カ月後にはすべてのマシンが稼働致しました。これは驚異的なスピードであり非常に驚いて

おります。余震もある困難な中で工場長を始め従業員の皆さんの熱意と努力のたまものであり、この工場の努力に報いなければならないという決意しております。  
また私個人としては5年ぶりの新聞営業ですが、お客様の中には以前からお世話になった方々が現在も多くご担当されておりますの

で、精神的な安心感があります。これまで新聞営業で培った経験を生かしながら、また新たな気持ちで頑張りますのでご指導の程よろしくお願い申し上げます。

## 東日本大震災から現在に至るまでの思い

東日本大震災により、国内新聞用紙供給能力の約15%を有する岩沼工場が被災し、用紙の供給不足が大きな懸念事項となりました。そのため、日本製紙連合会を通じ日本新聞協会に対して緊急事態宣言をお願いせざるを得ない状況と

なりましたが、同時に、新聞発行に影響を与えるような事態が絶対にあってはならないと考えておりました。

当社として、新聞発行に支障をきたさないために何が出来るのかを考え、二つのことに注力しました。一点目は岩沼工場のバックアップ体制です。国内では、釧路・勇払・富士・八代工場で新聞用紙のフル生産体制をとり、海外では、当社との合弁事業であるNORPACに応援生産を依頼し、供給の総量確保を目標と致しております。(2ページに続く)

指しました。これらの方策を表明することにより、新聞用紙に対する供給不安をある程度和らげることが出来たのではないかと感じております。二点目は新聞社の皆様が素早い判断を行えるように、当社として出来ること、出来ないことをはっきりさせながら新聞社の皆様への情報提供に努めることを心掛けました。手前味噌ですが、震災後の当社スタッフ(本社は品質保証部を含めると24名)の働きには一定の評価をしております。

また、新聞社の皆様の「どんなことがあっても新聞を発行していく」という姿勢については非常に感銘を受け、供給責任を改めて強く感じました。これまでも緊急事態に備えてきたつもりですが、やはり机上のリスク評価に過ぎません。今回は広範囲に物流機能が失われたため、軽油が無い、プロパンが無い、といった状況も発生しました。今後、リスク評価の手法を修正する必要があると感じています。

## 今後の新聞用紙事業の展望

国内需要は2005年をピークに減少し、昨年は2005年対比で▲10%の335万トンでした。今後も広告状況やITの進展、人口減少などの外部環境により厳しい状況が続くことが予測されますが、日本固有の戸別配達制度が存在する限り、米国のような急激な需要の落ち込みは少ないと考えています。しかし、緩やかな需要減少が続くことが予測される中で、当社の新聞用紙事業を再生産可能な事業と



## 一橋一丁 いっきょういつちょう

今回の震災では最大規模の地震と巨大津波による甚大な被害に加え、最悪の原発事故が復興を阻んでいる。震災直後、TVで放映された原発建屋の水素爆発は世界をも震撼させることになったが、安全をうたう原発の何が問題であったのか、私なりにまとめてみたい。◆原発は原子の核分裂により発生する熱で蒸気を発生しタービンを回して発電する。核分裂効率を上げるため核分裂性ウラン235を濃縮し、これをペレット状にしてジルコニウム製の管内に納め燃料棒として使用する。核分裂により中性子が発生し連鎖的に核分裂が継続する(臨界状態と呼ぶ)が、この核分裂の暴走を制御するため、炉内には中性子を吸収する物質を収納した制御棒が組み込まれている。◆地震直後、まだ電源が確保されている時点で、制御棒が燃料棒に押込まれ核分裂は停止した。最悪の炉心爆発は回避出来たが、燃料は崩壊熱により発熱しているため炉心を冷却する必要がある。しかし今回冷却システムを稼働させることが出来なかった。電源ラインが遮断されたため通常の冷却システムに加え、予備の冷却システムも停止した。あらかじめこの事態を想定して設置された非常炉心冷却装置も、津波による発電機の破損によって稼働出来なかった。その結果、熱により燃料棒を浸漬している冷却水が沸騰蒸発し、燃料棒が露出する。更に高温による燃料棒ジルコニウムの酸化により水素が発生。このままでは高圧により格納容器と原子炉が吹き飛んでしまうことから、ベントにより内圧の放出を実施し最悪の事態は回避するも、建屋内で水素爆発が発生し放射能が広く拡散することになった。◆今回の水素爆発は、全電源喪失が引き金となっている。電源は通常の送電線を介したものの以外に、据付発電機や移動式発電機、バッテリーまでが準備されていたという。しかし据付発電機13基はすべて水没やオイルタンク流出で稼働不能となり、移動式発電機はプラグ形状が異なったため接続出来ず、更にはバッテリーも稼働が8時間のみと、一時凌ぎのものでしかなかった。絶対安全をうたった原発のシステムとしてはあまりにもお粗末との印象を受ける。◆作業上の事故や品質上の事故を回避することがどれだけ難しいことか、我々も日ごろ痛感するところである。不幸にも事故が発生してしまった際には、原因と対策を十分話し合い、その情報を横展開して再発防止を徹底させることが重要である。これはそのまま原発にも当てはまることであり、ぜひとも今回の事故で明らかになった問題点を教訓として全原発で再確認し、我々国民に情報を開示し、再発防止対策を施策する必要があるだろう。(S)

## 私どもが考える 新聞営業の在り方

新聞社と我々メーカーの関係は、共存共栄が基本と考えていますので、自分たちだけ栄えれば良いということはありません。また、双方の諸先輩方が築き上げてきた伝統があるからこそ、良い関係が出来ていると思っています。新聞社の皆様と共に、我々も新聞用紙の供給を通して社会に貢献していく形が本来の在り方だと思っています。単に売る側、買う側の立ち位置ではなく、お互いにより良くしようというスタンスで率直に話し合いが出来るような関係を築かせて頂くことで、双方の業界の発展につなげて行きたいと思っております。

## 新聞社へのメッセージ

今回の震災により、新聞の持つ普遍的な価値が改めて見直されたのではないかと考えています。テレビやインターネットで情報を得ることは出来ても、より詳しい解説を含めた確かな情報は新聞でないと得られないということが再認識されたのではないのでしょうか。この機に、更に新聞の価値を高めて頂くことを心から願っております。我々メーカーも、用紙供給の立場から精一杯ご協力させて頂く所存ですので、今後ともよろしくお願い致します。

- あかつりゅういち  
**赤津 隆一 略歴**  
昭和28年3月17日生  
出身地/福島県
- 昭和50年4月 十條製紙(株)入社
  - 平成12年6月 日本製紙(株)中部営業支社長
  - 13年7月 日本紙共販(株)出向(中部支社長)
  - 14年7月 新聞営業本部新聞営業部長
  - 15年4月 日本製紙(株)新聞営業本部新聞営業部長
  - 16年6月 参与新聞営業本部長代理兼新聞営業部長
  - 18年7月 参与新聞営業本部長代理
  - 19年6月 参与関西営業支社長
  - 20年6月 取締役関西営業支社長
  - 21年6月 取締役情報・産業用紙営業本部長
  - 23年3月 取締役新聞営業本部長



## 倉田博美 石巻・岩沼工場長 「被災工場の復興を考える」

東日本大震災により操業を停止していた岩沼工場は、4月10日に3号機が稼働、その後順次抄紙機を立上げ、5月11日に完全復旧を果たしました。津波の影響で現在も操業を停止している石巻工場は、一部マシンの9月稼働を目指し復興に取り組んでいます。その陣頭指揮にあたる専務取締役倉田博美工場長に、復旧・復興への思いを伺いました。(インタビュー かわら版NIPPON編集長 佐藤貴光)



最初に、この度の震災により亡くなられた方々に対し、心よりご冥福をお祈りします。また、大切なご家族・ご親族を亡くされ、家・財産を失うなど大きな被害を受けられた方々に、謹んでお悔やみ、お見舞いを申し上げます。

各新聞社の皆様には大変ご心配をお掛けしました。安定供給に対する責務、新聞発行体制に影響を与えてはいけないとの思い、これらの思いがあったからこそ復旧・復興作業を工場一丸となって頑張ることが出来たと考えています。

### 出張からの帰りに震災に遭ったそうですが？

東京からの帰路、仙台駅から車で石巻に向った直後に、激しい横揺れに遭いました。いったん車を停止させ、揺れが収まるのを待って先を急ぎましたが、信号は消え、高速道路も止まり、各所で渋滞が発生しており、普段であれば1時間で着く道を3時間近く掛かり、やっと石巻市内に到着することが出来ました。その途中、吉田川を見ると数軒の民家の屋根が上

流に向かって流されているのが見え、背筋が寒くなるのを覚えました。

石巻市内に入ると家屋の倒壊、津波で流された車など、周りの状況は目を覆うばかりでした。工場方面へはどの道も浸水で入れず、高台に行き途中で一夜を過ごすことになりました。次の日も工場に通ずる道は無く、車中で2泊となり、3日目の朝になって土手伝いに徒歩で2時間半、ようやく工場社宅に到達し避難して、従業員と合流することが出来ました。

被災した石巻工場を目的

当りにして衝撃を受けましたが、このような惨状下にもかかわらず当日工場構内で働いていた1306人全員が無事だったことを知り、冷静な判断で訓練通り避難した従業員に感謝するとともに、大変誇りに感じております。しかしながら、一番だった一部の方が、津波の被害に遭ってしまったのは本当に残念で心が痛みます。

### 岩沼工場は津波の直撃を免れましたが、海沿いの排水場が津波の被害を受けました。

製紙工場は大量の水を使用するので、この排水設備をいかに早期復旧させるかが重要なポイントであり、我々はその復旧に全力を尽くしました。震災後1週間は行方不明者の捜索のため施設のある地域に近づくことすら許可されませんでした。この排水場は市の施設でしたが、岩沼市も津波の

被害を受けており、自治体の対応を待たずに岩沼市と協議し当社が発電機を設置し復旧を急ぐこととしました。

排水施設内にはポンプが5台設置されてどれも海水を被っておりましたが、1台整備中でモーターが無事だったのが幸いしました。排水口は排水を流していないと大潮時に砂で埋まってしまう。その都度スコップでかき出すのですが次の日の朝に行ってみるとまた埋まっています。そのため夜間も排水を流し続ける必要が生じ発電機の給油などに2人組みで交代で現場に張り付けてもらいました。

現場は海岸近くにあり余震で津波警報が出る度に避難しながらの対応でした。周りの民家は津波で壊滅的な被害を受けており行方不明者もたくさんいます。真暗闇でトイレも無く、そんな中で夜間ここを守ってくれた従業員には本当に感謝



岩沼工場の完全復旧を受け掲げられた旗のぼり。「がんばろう岩沼」「がんばろう日本!」「おかげ様で操業再開!」の文字が泳ぐ。

しています。

### そうした努力が実って震災から1カ月後には3号機が稼働しました。

抄紙機自体の被害は少なかったのですが、抄紙機の建屋や大型の天井クレーンが被害を受けました。これらの復旧作業の大きな障害になったのはやはり余震です。レールから外れたクレーンを元に戻す作業は、高所である上に、クレーンの下に入って作業する必要があります。この危険な作業に従事して下さる作業員の方の安全を確保するため、余震時の一時避難用に別の足場を設け、余震が続く中でも少しでも安心して働ける環境を整えました。

石巻工場の復旧には時間が掛かるので電気・計装・設計といった工務系の優秀なスタッフを岩沼工場に結集してもらい、他工場の応援

者と一緒にはまず岩沼の早期立ち上げを目指しました。そんなことで、ちょうど震災1カ月で立ち上げることが出来ました。

### 石巻工場のがれきもだいぶ片付いてきたように見えます。

4月末に仮設プレハブ事務所が出来上がり、現在は工場構内の清掃・復旧作業などで毎日1500人以上が構内で作業を行っています。長期にわたって基幹工場が操業停止になっている事態を続けるわけにはいきません。リリースしました通り、9月に一部のマシンを稼働させその後順次運転する予定です。

抄紙機の立ち上げには用排水・ボイラー・原料工程など幅広い設備を稼働させる必要がありますが、1台のマシンを稼働させるためにそれらをすべて復旧させますので、その後のマシン立ち上げにはそれほど時間は

掛からないと考えています。構内で働く人たちが目標を共有化し、一丸となって復興作業を進め、年内には主要マシンを稼働させる計画です。石巻・岩沼両工場を始め他工場など日本製紙グループの力を結集して復興を実現させていきます。

### 石巻工場には『復興』という表現を使っていますが？

石巻工場は、単なる『復旧』ではなく、より競争力のある基幹工場として『復興』させていきたいと思っています。各設備の在り方・配置・物流などを見直します。津波対策も盛り込まなければなりません。また将来の市況動向を見据え、新たな視点と戦略に基づいて、本社災害復興対策本部と連携を密にしながら復興作業を進めていきます。

また今回の震災により、石巻市と周辺自治体は壊滅状態に陥りました。津波が

もたらしたのがれきや土砂を処理し、港湾・物流関連設備を整備し、電気・ガス・下水処理などのインフラ関連設備を復旧させ、地域全体の復興を図るにはかなり長い期間を要することが予想されます。

日本製紙石巻工場は地域経済を牽引する役割を果たしていくと同時に、地域の中長期的な復興計画に積極的に参画し、地域と共に復興を目指していきたいと考えております。

### 北海道新聞の『読者の声』欄(4月6日付)に投稿されたそうですが？

私は北海道出身で就職後も北海道内勤務が続き、昨年初めて道外に転勤になり今回の震災に遭いました。震災後数日たって各地から支援物資が届き始めたのですが、札幌や室蘭ナンバーの救援トラックが目に残りました。津軽海峡を渡り、いち早くふるさと北海道か

ら支援物資が届いたことに感激し感謝の気持ちを伝えたいと思い投稿しました。

全国からの支援は物資だけではなくありません。救急隊や消防隊、警察の皆さん、自衛隊や自治体の職員さん、病院の看護師さんなど全国各地から来て頂いております。多くのボランティアの人達や米軍なども含め、全国・全世界の人達から支えられていると強く感じ心から感謝しています。

### 硬式野球部も復旧作業やボランティアに活躍しているとのことでした。

現場で約2カ月間のがれきの片付けなどに従事した後、5月中旬から練習を再開しています。こんな時に野球?という声もあるかもしれませんが、石巻工場復興のシンボルとして、野球部には秋の都市対抗本選に再び出場し、ぜひ良い成績を残して欲しいと思っています。野球部の活躍が石巻

(8ページに続く)

左/二ノ倉排水処理場、3月18日視察時は排水口が見える。中/3月20日大潮により排水口が砂で完全に埋没。右/重機を現場に入れることが出来ないことから、スコップ隊を編成。昼夜にわたって砂をかき出す。



左/4月末に完成した石巻工場の仮設プレハブ事務所。復興作業の拠点となる。右/毎日1500人以上が復興作業に従事。作業前のラジオ体操風景。





左/門脇小学校の球児と当社野球部員がキャッチボールの後に記念撮影。  
右上/感謝の気持ちを伝える横断幕。大阪ドームに掲げることを目標に。  
右下/全国から寄せられた野球用具を門脇小学校の球児に寄贈。

という地域全体を元気づける大きな力となっていければと願っています。

また、地域への貢献も重要な役割です。野球用具を失った市内の球児を支援するため、全国の野球関係者に用具の提供を呼び掛けました。その結果、多くの団体からたくさんの用具が寄せられました。提供された用具は野球部員から近くの門脇小学校の球児へ手渡し一緒にキャッチボールなどして喜んでもらいました。その後集まった用具は順次、他の少年野球チームへ届けられています。

現在、野球部は他のチームと練習試合を行いながら各地を転戦しています。この機会に全国の皆さんに感謝の意を示すべく、『東北へのご支援に感謝申し上げます。』という横断幕を作り、この幕を掲げながら試合を行っています。今年の秋、大阪ドームにこの横断幕を掲げ、東北を代表して

全国民にお礼の気持ちを伝えるのが目標です。

石巻と岩沼両工場に掲げた鯉のぼりも復興のシンボルですね。

4月25日、復興への決意を込めて、「今こそ団結!! 石巻」と書かれた従業員製作による15メートルの特製鯉のぼりを石巻工場の煙突に掲げました。また、5月11日には、岩沼工場の完全復旧に至るまで、ご心配を掛けた地元の方々を始め、ご支援を頂いた取引先や関係者の皆様への感謝の気持ちを込めて、工場煙突に「おかげさまで操業再開!」のメッセージを載せた鯉のぼりを掲揚しております。地域と共に復興するという我々の意志が伝わればと思っています。

好きな言葉は『日々是好日』と伺いました。

『日々是好日(にちにちこれこうにち)』は禅語で

中国、雲門の教えです。一見明快で、毎日が好い日であるということですが、この言葉は、日に良し悪しはない、自己の尺度だけで判断してはいけません。どんな苦しい状況に置かれても、これ好日、結構なことですよ、カラ元気でなく心から味わえるようにならないといけませんと説いています。

さすがに今回の震災後は何をどう見てもとてもそうは思えないと感じていましたが、日がたつにつれ、震災によって見えてきた良いこともあることに気付いてきました。もちろん辛いことや悲しいこととは比較になりませんが、家族の絆だったり、当社グループの

結束力、工場でも普段気付かなかった従業員の能力に感心させられたり、こんな時でも良いことはゼロではない、そう思って良いことを探し始めてみると少し元気が出て来ました。これからも復興に向けて多くの困難があると思いますが、この言葉を忘れずに取り組みで行こうと思います。

最後に全国のユーザーの皆様一言お願いします。

3月11日に起こった東日本大震災は、我々の想像を絶する災害でした。大切な家族・親戚・友人、家や財産など多くのものを失いました。私たちはこの大きな悲しみと困難を乗り越え気持

ちをひとつにして再出発することを誓い合い、「泣くだけ泣いたらさあ行くぞ!」そんな気持ちで歩み始めています。

ユーザーの皆様には大変ご心配をお掛けしましたが、これからも当社の総力を結集して、ユーザーの皆様へ高品質の製品をお届け出来るよう努力したいと思います。最後に、震災直後から多くのご支援、励ましを頂きました新聞社様を始め多くの皆様に対し、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。



倉田工場長直筆の「日々是好日」。